



馬耳東風

「にれかめる牛に春日のとどまれり」／鈴木牛後。北海道下川町の牧場のどかな雪解けの春の光景が眼に浮かぶ。朝早く牛舎の扉を開けると待っていた牛たちが一斉に顔を向けて朝の餌を待つ。搾乳機のスイッチを入れる。牛たちは餌を食べながら乳を搾られることの快感をむき出しにする。機械搾りの時代、バキュームが乳首を吸い込む音と感触が泌乳を促進するようだ。搾られた牛乳が透明なパイプラインを波打ちながらタンクに注がれる。搾られた生温かい乳がみるみる蓄えられ冷却されてゆく。搾乳している間に、産房に入れておいたおなかの大きい牛が子どもを産み落とした。「羊水ごと子牛どすと生れて春」。春の絶好の季節を待って当たり前のように起立姿勢でひとうなりして子を産み落とした。同時に胎水が一気にドバツと噴出した。まさに安産のうれしい表現だ。胎盤はまだ引きずったままだ。母牛が息づきはじめて子牛の胎膜を丁寧になめ始めた。子牛は頭を持ち上げはじめ、よろよろ起立しそうだ。初めての歩みだ。何回か倒れそうになりながら、やがて母牛の乳房にたどり着く。自然界の当たり前の光景だ。生まれた子牛は、人の手で哺乳される。軍手をはめた手で子牛小屋へ運ばれる。子牛の身体についていたお産の血が軍手にへばりつく。「血の軍手春日に干してまた履きぬ」。お産の血は清らかな血だ。洗って春日に干せばまた使える。「冷やかや人工乳首に螺子がある」。親から離された子牛は初乳を人の手で飲む。いかにも産業の保育だ。搾り終えた

牛たちは、ストールから解き放たれて放牧場へ開放される。先頭に立つのは元気な若いが多い。新緑の牧草を求めて歩を早める姿は、まさに生きる本性への歩みだ。「新緑へ続くや牛の第一胃」。第一胃を強調したこの句が、大地に生きる人と牛の真実を喝破している。牧草を食んだ牛は、静かに伏臥して反芻を始める。これこそが「にれかむ」だ。漢字の「齡・飼」が当てられる。沢山の牛を飼いながらの暮らしはすべてが順調ではない。「指を待つアンプル月光の棚に」。夜間診療の準備は確かか。棚に並べて月明かりで薬品を確認する獣医師の確かさがしのばれる。「牛死せり片眼は蒲公英に触れて」。「斃獣を吊り上げてゐる雲の峰」。放牧地で倒れた牛はタンポポの黄色の花びらが牛の眼の縁に死を悼んだ献花のようだ。やがて斃獣処理車が来て後肢を結わえてクレーンで高々と吊り上げる。その背景がきれいに映る。仕事をしながらふと目にとまった何気ない風景が17音に収まり、牛が反芻するようにかみ返し出てくる。構えて創るのではなく、身体を動かしながら染みでる、まさに生きた言葉の誕生である。人口の減少に見舞われ、生産基盤の畜産が主力の地域で広大な農地を守りながら、人生を豊かに働くことを賛歌する日々が続く。町の開拓100年記念に始めたミニ「万里の長城」の石積みに集う町民の逞しさが絆を生み、一歩前進する結束力を生む。北の町で生まれた心豊かに生きる酪農俳人の句である。

突然の侵攻におびえるウクライナの人々が、畑に当たり前に種のまける春であることを祈りながら。

(柏)